

元気のタネ

Interview

日常生活で使われる身近な品々、その原料となるアブラヤシ農園が野生動物の棲む熱帯雨林を圧迫。緑の回廊計画で共生の道を探る。

ボルネオ保全トラストジャパン 理事 黒島英俊さん
多摩動物公園 飼育員



分断された熱帯雨林の森をつなぎ野生動物が生息する緑の回廊通り、消防ホース利用のつり橋も。

食用や洗剤、さらにはバイオ燃料として大きな期待を寄せられているパーム油。アブラヤシの実から採れることなど、から、近年アブラヤシのプランテーションは急速に拡大している。



▲開墾で荒廃になったオランウータン生息域に苗木を植えるセピロック・ワハビリテーションセンター
キナバタンガン川流域に広がるアブラヤシのプランテーション

オランウータン調査のため出かけました。マレーシア・サバ州を流れるキナバタンガン川流域は広大な熱帯雨林の森が広がり、オランウータンやボルネオゾウなど多種多様な野生動物の生息地。ところが熱帯雨林のジャン

域に閉じ込められたオランウータンや、ボルネオゾウなどの野生動物はアブラヤシを食べるなど、するので害獣扱いされ、まさに生存の危機にさらされていた。いまや絶滅危惧種に分類されるものも多い。

そこで、ボルネオ保全トラスト（BCT）が設立され、2006年に緑の回廊計画がスタートした。キナバタンガン川とセガマ川沿いの分断された保護区の森をつなぐように土地を買収する

黒島さんは、この活動を支援するBCTジャパンの設立発起人に加わる。それとともに、孤立する森を対岸の森につなげるつり橋架設の活動をはじめた。

「樹上生活が基本であるオランウータンは、ジャングルの中でしか移動できません。昔は兩岸の森が豊かだったので枝から枝を伝って川を渡る事ができましたが、今は森が貧弱で、水が怖くて渡ることができない。多摩動物公園で消防ホースの廃品を利用してオランウータンの遊具を作った経験から、ここにも同じように消防ホースでつり橋をつけようと思いついたんです。昨年、今年と一本ずつ作りました。まだオランウータンが渡っているのが確認されていないのですが」と黒島さん、穏やかに述べた能力を持つオランウータンの住処。

熱帯雨林の森を守る
黒島さんは、上野動物園、多摩動物公園と三十数年に渡って類人猿（ゴリラ、オランウータン、チンパンジー）の飼育を手がけてきて、彼らの知能の高さにはおおいに信頼を置いている。なかでもオランウータンは穏やかな性格で、たいへんな集中力と記憶力の持ち主。



▲つり橋は商品の消防ホースで作る
川を横切り森と森を結ぶつり橋2号



▼ルサン川に完成した全長40mのつり橋2号
写真提供: BCTジャパン

日本においてもなたね油、大豆油に次いで多く使用され、食用や洗剤、化粧品など、われわれのごく身近な品々に使われている。

いつたん信頼感を損ねるとなかなかその修復は難しいともいう。「オランウータンは子育ての期間が長い。森で暮らしていく知恵を、母親が7、8年かけて子どもに教えます。その間、次の子は生まれませんから、生涯のうちに生む子どもの数は少ない。絶滅の可能性も高まります。だからこそ生息環境の改善・整備は緊急を要するのだ。彼らの住処を圧迫しているアブラヤシから採れるパーム油は、

同時に、オランウータンをはじめ多くの野生動物の置かれている状況は、よその国の遠い話ではなく、日本のわれわれの暮らしと密接につながっているとの自覚も必要だろうだ。

くろとりひでとし・プロフィール
1982年生まれ。茨城大学農学部畜産科卒業。千葉大学大学院で動物の繁殖生理学を学ぶ。18年より多摩動物公園の飼育員。2002年多摩動物公園に異動。その後13年にわたりゴリラ、チンパンジー、オランウータンなど類人猿の飼育・繁殖に関わる。04年オランウータンの調査でボルネオに赴き野生動物の保護活動に。熱帯雨林回廊に取り組み、ボルネオ保全トラスト(BCT)を支援するBCTジャパンの設立に加わる。著書に「アブラヤシの回廊」(アブラヤシの回廊)など。BCTジャパンURL: <http://www.bct.jp/>